

芭蕉俳句の構文と表意

——客語の主体化について

高 羽 四 郎

初めに観察の範囲、主眼、方法などを摘記する。客語を持つ他動詞の例、「Aは・Bを・―する」の形は芭蕉の句にも数多く現われる。その中から少数を引き、構文と表意の関係を考えながら、客語(B)が主位に立つ事情というのを観察の重点とする。なお若し引例と字句に異同のある別形が残されており、それがもとの客語を主語に取る自動文「Bが・―する」の文形である場合、これを格好の手懸りとして参照する。例えば

鷹一つ見付てうれしいらと崎(愛小文・I芳野八/続原下・Ⅱ冬句一一/笈日記中
・V尾張三〇)

は「タカ」を「を」で取る他動表現であるから例題中の見出しとして引用する。そして

夢よりも現の鷹を頼母しき(鶴尾冠中・三八二)

は「タカ」が主語に立つ形であるから、参照例として付記し、この方にはイという符号を添えた。見出し句には別に印しを被せないけれども、観察中に言及する場合はアと呼んで対照する。ア・イの順序は全く外形に抛り、作者の推考過程とは無関係である。例題はすべて芭蕉の俳句(発句と若干の付句)であるから、単に出所だけを

芭蕉俳句の構文と表意 —— 客語の主体化について

記し、他家の句を挙げる際にはもちろん作者名をも記載する。

俳句は短い詩形である。内形の約束や表現の簡略があつて、判読は人の補足に委せる部分が小さくない。こんど僅かな数の句解を見ただけであるが、計らぬ読み方のあることを教わつた。門外からの判断は錯誤の多いことを恐れる。出来るだけ可能性を並べ、決定は差し控えることにする。

例題 A 人に関する例

I 人が主語の場合

1 衰や齒に喰あてし海苔の砂(日光・Ⅱ春部一六/おとろひや 今日昔・I諸句一〇三)

イ 嚙當る身のおとろひや苔の砂(西雲下・Ⅲ春句四四)

2 語られぬ湯殿にぬらす袂かな(細道・三四)

イ 語られぬゆどのにぬるゝ袂哉(華摘上・八四)

3 ひら／＼とあぐる扇や雲の峯(笈日記上・Ⅳ湖南三四/あぐる扇 簡突・二一九)

イ ひら／＼とあがる扇や雲のみね(桃紙・Ⅳ雲峯一)

4 藤の實は俳諧にせん花の跡(藤実・I秋句一/泊船四・一四六)

5 道の邊の權は馬の喰ひけり(伊達衣下・三六四)

イ 道のへの木權は馬にくはれけり(甲子吟行・Ⅰ紀行七/泊船一・道紀七)

6 鞍蓋に小坊主のせて大根引(陸奥千鳥一・Ⅴ蕉句八二)

イ 鞍蓋に小坊主乘るや大根引(炭俵下・Ⅱ冬句一七/藤実・Ⅲ冬句一五/泊船五・四六)

7 あさかはや昼は鎖おろす門の垣(小文庫下・Ⅲ秋句五/今日昔・Ⅴ秋句三三/錠おろす 炭俵下・Ⅰ秋句一五/藤実・Ⅰ秋句一五)

8 五月雨や色紙へきたる壁の跡(雑談集首・Ⅲ文通四七/嵯峨日記・三四)

イ 五月雨や色紙まくれし壁の跡(笈日記上・Ⅲ京都七/泊船三・二八)

Ⅱ 人が客語の場合

9 きぬたうちて我にきかせよ坊かつま(荒野四・Ⅰ中秋二二/われに聞せよや 統虚粟下・Ⅰ秋部九九/泊船一・道紀一六)

参 月さびよ明智が妻の咄しせん(勸進帳上・Ⅳ秋句一五/泊船四・五一/月さひて 小文庫下・Ⅲ秋句七九)

10 うき我をさひしからせよかんど鳥(猿蓑二・夏句一三/嵯峨日記・七/篇突・一七二/泊船三・一一二)

参 こちらむけ我もさひしき秋の暮(笈日記上・Ⅲ京都三/統別座敷上・Ⅳ秋句二四九/泊船四・一二四)

11 雲折く人をやすむる月見哉(春日・Ⅳ秋句四/統虚粟下・Ⅰ秋部六一/人をやすめる 孤松利四二/篇突・二三/人ややすまる 住吉物語上秋部三)

12 宿かりて名をなのらすしけれかな(統猿蓑下・Ⅴ原句二〇/宿かして 小文庫上・Ⅰ冬句一/泊船五・四)

人の行為や感情を述べる作品を例題Aとし、人が主語に立つ文形をI項に拾った。最初の「(衰えや) 齒に・食いあてし・のりの砂」は形義ともに明白である。人称代名詞の主語は省かれるのが常であるから、その人(私)を補い、「砂を齒に食いあてる」と読んで何の問題もない。この用法から類推して「嘸當る」をも他動詞

「かみあてる」と読むのは自然であり、そう読んだ場合はアと同形、句意に疑問は起こらない。ただ「當る」の表記は「あたる」に用いられることの方が俳諧例に多いのである。それで仮に「かみあたる」の訓を取ってみると、「(自分が) 砂に・かみあたる」の構文となるはずである。これにはしかし疑念が少し残る。「身の衰えにかみあたる」の形、からだの弱りを感じる意が響くかとも見られ、かみあたるのは身か、それとも砂かとも疑えば疑われることになる。さすがに「砂がかみあたる」はこじつけと感ぜられるが、明確にその形を示す事例があと幾つか重なる。こんな細末の分析は棄てて、イを通読する。情意は短的に流通、それがアと一致する。表現を求めて動く作者の心を二形から受け取るだけにして次へ移る。2の「(語られぬ) 湯殿に・ぬらす「イぬるる」・たもと」はなおさらに平明である。出羽三山では殊に深い感激を覚えたことが「奥の細道」に記されている。他言を禁ぜられた靈山のこととて、僅かにその感動をこんな押えた言葉で表わしたのであろう。語られぬのは湯殿山でなく、言い尽せぬ心であったかも知れない。「たもととぬらす」も「たもとがぬれる」も同じく落涙を意味する成句、文義にもア・イは殆ど差がない。しかし余情は少し違っている。「ぬらす」は能動的、感動者の主体面を、「ぬれる」は静観的、感動への注視を伝える。次例では情意が一層分かれる。3「(ひらひらと) 揚ぐる・扇」は能楽家(本間主馬)に対してその芸能を称した言葉とのことである。この文形では「揚ぐ」が動義の著しい語であるから、舞台上の人とその仕舞とが現前する。イ「揚がる扇」は扇の描写、ひらひらとする映像が鮮明である。一つの事象を見ながら、人

(主体)と物(客体)とが交互に出没するこの作者の心裏がうかがわれるようである。第4句へ入ると視線は人よりむしろ物の方向に移されている。「フジの実は・俳諧に・せん」と行為を勧誘しているようであるが、特に俳人や俳諧のものを取り立てて言うのではないであろう。「フジの実は俳諧になる」というほどの意、目を留めて見れば、こんな物にも詩のあることを告げるのであり、「は」の一字からもそれは知られる。次は生物の一例であるが、助詞の用法という点でここに援用した。5「(道のべの)ムクゲは・馬の・食らいけり」では、馬の思わぬ行動に驚いたこの作者が目前の光景をただ一筋に言い述べている。語順や助詞の使い分け(は馬の)があつて、話者の関心は花の方に注がれていたことがよく分かる。それでも主語が馬の構文であるから、文意の重点もその方へ落ちることを氣使ひ、イのような動かぬ表現に定めたのであろう。何れムクゲの句であることは明かであり、その花に託して一種の感想を漏らしているのだと推量する。しばしば被動者の側に同応するものこの人の一面と考えられ、類例は多い。自他二形のある作例を次に一顧する。6「くらつぽに・小坊主・乗せて(ダイコ引き)」は発句としては大根引きの行事を歌う一章である。しかし読者の目に浮かぶ姿は馬上の子供である。下の五文字が切れて、残る部分で独立し易いのも発句の約束の一つである(既出3・4)。作者もこの句形で子供の描写が主になる効果を期待したはずである。しかもイのような自動表現にした事情は前例の場合と同じであらう。この句形については郷土の門人服部土芳に対し「のるや大根引と小坊主のよく目に立つ処句作あり」と自説した由が「三草紙(赤)」に記されている。なおここ

芭蕉俳句の構文と表意 —— 客語の主体化について

で別の事柄について一言する。ア「小坊主乗せて」は「て」の働きで一種の完了用法となり、「小坊主を乗せたまま」の意がはっきり示されている。そうするとイの「小坊主乗るや」も継続義、馬上の光景を指すものと見られ、事実また去来がこの句形に言及して「鞍つほに小坊主のちよつこりと乗たる図」(抄中)と述べた時には状態義に解していたことが明白である。主体の行為面が弱まり、客体の状態面が強まることと、後者の主体化とは関連があると推せられる。その点を次例について観察する。7「朝顔やー(昼は)錠・おろす(門のかき)」でこの花を主語と見る読み方は差し措いてよいであらう。そう解したところで遊離し易い上の五文字である。錠を下ろすのはもちろん人であり、さらに言葉書きの語「閉関」と結び付けて、その人の行為そのものを指す表現と取るのもとより当然である。しかし全文を再読すると、この錠は閉ざれていることを感ずる。昼への繋がりはその方が自然である。ここを一度そう解すると、今度は錠の下りた門の状況が鮮かに浮き上ってくる。

この木戸や鎖のき、れて冬の月——其角(猿蓑)・冬句五六/勧進帳上・冬句六

二) は錠についての受身文である。背景も違い、もちろん作者は別であるが、中の七文字は意外に近似するのでなかろうか。人の能動、物の被動が結局合流する事情を次に尋ねる。8「色紙・へぎたる(壁の跡)」では述部がはっきりと完了の形になっており、行為の結果を表わす働きは明白である。「誰かが色紙をへぎとり、その跡がなお残る」は、イ「色紙・まくれし(壁の跡)」と表裏から一致している。へぐ(はがす・まくる)は他動義。まくれる(はがれる)へ

げる)は被動義であるから、主客入れ替つても同義は当然のことと言えるかも知れない。しかし「紙を壁からへぐ」と「紙が壁からまくれる」とは文の趣旨が異なるはずである。それがここでは意外なほどに合一している。この性格は恐らく発句の内形―上五・座五が分離する傾向―に因ることかと臆測せられる。事象の一層進んで見える文形が例題Bに出ており、その個所で再検する。

Ⅱ項にはことさらに客語に置かれた構文を取り出した。この場合人の主体化がいよいよ著しいことは容易に予想せられる。観察に入る前に引例に共通する性格として使役形の多い点を指摘しておきたい。一般に「す(さす)」が用いられる場合、もし動詞が自動詞であれば客体(被動者)は「を」で、他動詞であれば「に」で示される習慣があり、挙例においてもそれが交互している。しかし使役義そのものには格別な違いがないのも実状であり、ことに当面の問題とは無関係のことであるから、この点への言及は全く省略する。初文9「きぬた打ちて―我に・聞かせよ(坊が妻)」はその時の言葉をもそのまま用いた作例であろう。相手は寺の女あるじなので、その人への心使いからこんなあいさつをしたのかと思う。もともと「聞かす」は「聞くことを許す」ほどの表意であるが、今日ではその程度の使役義もなく、また尊卑の対人意識などは含めずに使われている。手元の資料は少数であるが、その範囲内では元禄当時の用法も今日とそう著しい相違がなかったように判断せられる。もしそうだとすれば、「あなたのきぬたを私に聞かせて下さい」は、「私はあなたのきぬたが聞きたい」と随分接近することになる。妻はこの場の主人であるが、客人は話し手である。「私」の方の主張が強

まるのも自然である。参考に引いた「月さびよ―明智が妻の話せん」は主客が逆の表現であるのに、情意はどこかで共通する。10「憂き我を・寂しがらせよ(カンコ鳥)」では鳥を友かなどのように呼びかけており、親和の情はよく現われている。それでも対者は樹上の野鳥であり、その声であるに過ぎない。門人の一人は後にこの師を追想して

月雪に淋しかられし紙子箴―許六(韻塞下・置月雪一)

と記している。こんな人柄の人物が独坐して、鳥声を聴いている姿を思えば、原句の大意は大かた済みそうである。しかし参句のように「我も寂しき」と言ってしまったのは少し違う。「寂しがらせる」には動義があり、変化・推移の意を含む。あるいはカンコ鳥の句にもう少し深い気持が潜められていたのかも知れない。11「雲折々人を休むる(月見)」はこの人が思った通りのそのまま素直な言葉なのであろう。月見をしながらその月が隠れて目も心も休まると言うのはおかしいのであるが、本当にそう感じたのだろうかと思う。そして月を隠す雲の方へかえって心を寄せたのだという気がする。一度自己を被動者の場に置いて、そこで物を感じ、そこから発想するのもこの作者の一つの態度だったと考える。12「宿借りて―名を名乗らする―しぐれ」の句は所載俳書の言葉書きから塚本如舟の家で宿を求めた時の吟であることが分かる。「宿借りて」の五文字は明白であるから、「名を名乗らする」にも人を予想し、如舟をこれに当てようとするのも当然である。恐らく作者もその読みを拒んでいないと思う。多分それがこの時の事実だったであろうから。しかし文表は時雨を主にしており、作者もその意図でした句作りなのである

う・類形は10に既出、またこれが俳句表現の常形でもある。従つてこの句の能因を時雨とする評家は多い。「芭蕉句選年考」中の記事に教えられ、念のため「師走囊」という句解の一書を開いてみた。はたして同書はこの一作のことを

時雨故思はず宿をとり 我名をならすせたるも時雨ゆへ也 との句なり

と述べている。以上人と時雨の両面からこれだけのことを聞き知つたうえで、この二者を放念する。そして単卒に話し手の場へ帰つてこの句を見直す。正しく自分の名を告げ、荒天に宿を借りえた喜びを表わす言葉と受けとつて簡明な読みではないであらうか。

以上Ⅱ項では人を客語に取る使役の四文を一巡した。ことさらに使役者を主として立てた表現であるから、それらに対する話者の評価が表明せられており、その事情はそれぞれ例文について重説した通りである。使役者とは言つても実は能因、しかも多くはその場の状況という類のものであるに過ぎない。他方被役者は人であり、例文ではそれが話し手である。実義の上ではこの方が表面化するのも自然であり、これもまた繁説した通りである。かくてこの文形は主・客の双方が互いに作用し、特殊な効果を見せる一種の発想様式と言ふことができる。そしてその効果は結局人を客位に置いて、反つてその側の主張を強める点にあるということであつた。

例題 B 物に関する例

I 物象

- 1 簾の露袴にかけしけり哉(後旅・I序二ノ泊船三・二八)
 参 なくては子にかくるなみたや桶の露(小文庫下・I夏句四一ノ泊船三・九〇)

芭蕉俳句の構文と表意 —— 客語の主体化について

- 2 しら露もこほさぬ萩のうねり哉(小文庫下・II秋句一七ノ類梧子上・六〇ノしら露を 泊船四・一二三)

I 白露もこほれぬ萩のうねり哉(あつめ句・古典大系本句集 32)

- 3 春雨も露をのはす岬の道(草の道・古典大系本句集 43)

参 道はそし相撲とり車の花の露(笈日記上・IV湖南三ノ會我上・II夏句九九)

- 4 しまくや千々にくたきて夏海(芭蕉句選拾遺・II夏部三)

I 嶋くや千々にくたきて夏海(蕉翁文集・古典大系本句集 35)

- 5 時鳥聲横ふや水の上(笈日記中・II大垣一三ノ横たふや 藤実・II夏句五ノ今日昔・I諸句一ノ篇突・四九ノ聲や横とふ 陸奥千鳥一・V蕉句三〇)

I 一とふの江に横たふやほととぎす(篇突・四八ノ一聲の 笈日記中・II大垣一三ノ草紙(赤)ノ青根が峯・巻四)

- 6 蘭の香や蝶の翅にたきものす(泊船一・道紀一ノ蝶のつはさに 笈日記中・VI伊勢一六)

参 門に入ればそつに蘭のにはほひ哉(笈日記中・VI伊勢六)

- 7 さみたれの雲吹おとせ大井川(笈日記下・I雲水四六ノさみたれの空 有磯海・IV夏句三四ノ泊船三・三九)

参 吹とはす石はあさまの野分哉(笈小文・I更科一三)

- 8 四方より花吹入て鳩の海(卯辰上・I春句一四ノには海 白馬下・I酒落堂一ノ湖の波 流川・II春句七ノ今日昔・II春句六三)

参 ぬす人の記念(かたみ)の松の吹おれて(付句)(冬日・I木枯二)

- 9 木枯に岩吹とかる杉間かな(笈日記下・I雲水五四ノ泊船五・三〇ノ木からしの 伊良胡崎・三五三)

参 鎖あけて月きし入よ浮き堂(笈日記上・IV湖南二ノ鷗獅子・IV收三ノ鎖明て 小文庫下・II秋句三五ノ泊船四・四七)

- 10 大比叡やしの字を引て一體(江戸広小路・古典大系本句集 32ノしを引捨し 芭蕉句選上・I春部一三)

11 六月や峯に雲置あらし山(句兄弟下・I追考一四五)夏日記上・I京都一〇ノ雲をく嵐山 陸奥鳥一・V蕉句五ノ六月や 行状記・I行状状

参 一尾根はしくる、雲かふしのゆき(泊船五、五)
12 あらみや佐渡に横本天川(其袋上・I夏部二二三)よこたふ天の川 勸進帳上・V秋句三ノ細道・四四ノ頼柑子上・二〇ノ横とふ 泊船四・五)

例題Bには主語が物と予想せられる文形を少数掲げた。擬人化の著しい生物に関するものは既にAへ含めており、ここに出すのはすべて無意志の現象を表わす記述である。人が主語の場合は述語との関係が緊密なものと比べ、物の場合は主・述の疎隔が甚しく、はたして主体は何なのか不明なことさえ珍しくない。かかる主語の遊離という事実がまた客語の自立に大きく関与すると推測せられる。先ずI項には物理的な事象に関する例文を取り、それらの点を考える。1「シノの露・はかまに・かけし(茂り)」は城主に随行して旅立つ人に寄せた一作であることが言葉書きに記されている。「かける」の主語について大系本『句集』は「茂り」を取っている。夏草の茂りを読む句であり、さらに伝統的な俳句形式を考えたいのでの正当な解釈と受け取られる。

註記 『日本古典文学大系』45『芭蕉句集』を大系本『句集』と略称した。本書は所載の発句ごとに主語を指摘するので、好個の資料としてこれまでも不断の参考にしてきた。以降も幾度か言及する。

一方しかし原句の文面から見ても「自分のはかまに露をかけてしまった」の意を読み取り、その人を主とする解釈も成立しうるのである。一体「露をかける」も「露がかかる」もさらには「人が露にかかる」も何れ一つの物象を言う慣用句である。主客の何かを深くは問わずこの一文を淡然と読み下ろす。はかまもすっかりぬれ通った旅の人

を思い浮べて、それでよい句趣なものはなからうか。続く2も同種の現象を記す類例であるが、自他の両形が残されており、容易に对照できる点で引用した。ハギの句であるから、露はこぼすでもこぼれるでも同帰と言えるのかも知れない。3の例文で少し細かく観察する。「(春雨や)ヨモギを・伸ばす(草の道)」について前記「句集」はその頭注で

春雨に雜草が生い、露が「まわ高くのびるのを」「草の道」が「露をのばす」と言つた。(発句編43)

と記している。これも発句の内約に則した正統の訓義なのである。しかし今人の意識からは草を茂らせるのはむしろ春雨の方が合理的のようにも感ぜられる。「芭蕉講座」の評釈は次の通りである。

「露をのばす」は春雨を擬人化したやうに見える人もあらうが、そこまで立入らなくともよい。自然に通過してみると、春雨の頃の窓外の景がまことによく生かされてゐるのに感ずる。(第二巻・二一八)

結局退けられる解ではあるが、春雨を主に見る人のありうることを告げている。幸田露伴はこう述べる。

露は他の草木とはちがつて雨に濡れた心持がことによいものである。細かい感じの出てるよい句である。寫實である。言ひ方が主観的なただけた。(『続芭蕉俳句研究』その三―露伴全集25・三六二)

「言ひ方が主観的」とのみで語法のことなどには触れていない。路傍の野草が力強く細雨に繁る清鮮の状をただ句中に認めればよしとしているのであろう。そしてこの意見は先に引用した二家の評語にもはっきりと一致し共通している。筆者が注目したのは、中七の「ヨモギを伸ばす」が主語から独立して、「ヨモギが伸びる」の意に帰一する、このような俳句表現の特性である。4「鳥じまや・千

々に砕きて・夏^{ナツ}の海^{ウミ}」は何が何を砕くと言うのであろうか。『芭蕉講座』はこう説明する。

一 望島々が點在して、夏の大海も千々に砕かれてゐるやうに見えるとの意。(第二卷・二八〇)

この言葉は島々を主語に取る解と推せられ、大系本「句集」の意見も同様である。一度そう指摘せられると、なるほど松島灣の景勝を称える島々の句だからと会得するのであるが、なお海を主にする読みの可能性が払消し切れない。「島々を砕く」のでは理が立たぬようでもあるが、もともとねじれた表現なのである。この一作には異形があって、イ「島々や千々に砕けて」と記されている。そうするといよいよ「島が砕けて海に散る」と見えそうに思うのはやはり目が暗いからであらうか。主語の何れを争うのが目的ではない。当面の觀察からは島でも海でも同じである。問題はこの類形で「砕きて」がそのまま「砕けて」と同義に平行して通用するということである。俳句表現ではこの種の自由がおのずと認められており、芭蕉はとりわけその許容を流用したのではなかったか。次は論義の多い一作である。しかし事例は既に幾つか重なり、述べる内容も同じであるから、結語だけを記す。5「ホトトギス声横たうや(水の上)」の外形についてはもう言わず、表意は「声が横たわる」と同果になっている。ことにイ「一声の江に横たうや(時鳥)」の方は構文のうえでも声が主語に立つ表現だとしておく。芭蕉は初めア・イの二文を並べて記し、その選択を人に尋ねたことがある。さらにこのことを幾人かの人に告げている。門人たちも珍しいことと思つたのであろう、数個の記録が残されている(例題B5イの^の出典参照)。それらを見て気付

芭蕉俳句の構文と表意 —— 客語の主体化について

く点は、詩趣についての論評はあつても、語法に関する意見は極めて稀薄だということである。当時の人は概括的、大意を領略してそれで十分だったのではないか。思考の著しく分化した今日では、語法が一つの要件のように見えるけれども、I項最後は「(蘭の香や) チョウウのつばさに・薫き物す」である。この主語は何かと聞かれれば、誰しも困るのではなからうか。「薫き物す」は動義の語であるから、一応は何かを主体に想定しながら、結局「薫き物がしてある」「薫る」ぐらいに読んでいるのが実情であらう。何も考えず、頭から受身の意に取つて、簡明に通ずる句が芭蕉に幾つもある。これはその一つである。

天象・氣象に関する表現をことさら別扱いにしてI項を設けた。この種の觀察が最初から到達目標になっていたのである。しかし実例が示す内情は既出のものと同様であり、さらに重ねての反復は自分ながら煩厭を感じる。足早に通り返したい。日月・風雪・雷電その他は特に著しい現象を見せる。これはそれぞれが主体的に行う活動として意識されているのが常であり、記述もその場から為されている。「月が地を照らす」「雲が山を包む」「雷が木を裂く」の如くである。主体はたとえ物であっても、それが主語に立つ形を人称表現と呼んでいる。ここにはこの種の類例をすべて保留し、ただ「風」の二文だけに代表せしめる。7「(さみだれの)雲・吹き落とせ(大井川)」はこの大河に対する呼びかけの言葉であるから、大井川が当然の主体となり、多くの人もその解を取るようである。しかし現実には雲を吹き落とすのは風のはずとも思える(例題には参として表現の著しい)。原句を再読する。上下の空間に風の動きと川の流れを

感じながら、目前に雲の飛び散る様を思えば、句意の済みそうな事
情は既に諸例で認めたと通りである。8 「(四方より)花・吹き入れ
て(におの海)」においてはもう動因(風・湖)のことに触れず、
「花がふぶき込み、水面にも散っている」と直説する(例題には客語が
二文を参考に掲げた)。¹⁾9 「錠明けて・月射し入れよ(浮御堂)」はこ
れを単卒に解し、錠が自然に明き、月がおのずと射しこむことへの
祈願文と見てはいかがであらうか。

初めからこれまで「Aは・Bを・―する」の構文で客体Bが主体
化し、「Bが・―する」の意が表面化する事情をたどってきた。観
察には繰り返しや行き帰りが多かったので、要約を試みる。例題末
尾に残った三文を引き直すと

大比叡や　しの字を引いて　一霞み
六月や　峯に雲置く　嵐山
荒海や　佐渡に横たう　天の川

の如くである。この表現では結局中央の部分が自立して、「しの字
が引かれる」「雲が置かれる」「雲が懸かる」「佐渡に横たわる(天
の川が)」などの意がくみ取られることになる。その原因として主
体であるべき物(山・荒海)が文意上遊離するからという見方を取
ってきた。さらにかかる遊離は初めの五文字あるいは結びの五文字
が主文と切れる傾向の強い発句表現の特性に因るといふ風に考えて
きた。これが既往の観察の概要である。

最後に視点を翻して別途からの疑問を提起しておきたい。上記三
例の場合などは殊に超人称表現(impersonal expression)との関

連がありはしないかの問題である。この表現様式については本誌「
国文学研究」第五号所載「:しかける」中で説明を試みているの
で、再説は控えて結論だけを述べる。古い時代にはある種の超人格
的な存在(Xと仮称)が認識せられ、それを主語に置く文形があっ
たとして、その種の表現をこう呼ぶのである。ところで若し仮に「
潮・引く」「霜・置く」「雲・横たう」などもこの種の構文だった
との仮想が容れうるものであれば、これらは「Xが―潮を引く(霜
を置く・雲を横たう)」の内意で設けられた文辞だったと言いうる
はずである。かかる未知の能因に対する意識はいち早く失われ、そ
れとともに超人称表現も消えてしまった。ただその一部が後々まで
偶然の成句として残され、しかも話し手の主体観念は変っているの
で、文構成が推移することになる。例えば今日用いられる「潮が引
く」はその一証と見られる。時代の少しさかのぼった俳諧の例文で
は「霜(露)置く」が慣用句として頻出する。もしや「横たう」に
も同種の用法があり、例えば「雲横たう」などの行われたことがあ
りはしなかったか。

この小考では客語の主体化ということをすべて人称表現の場から
観察した。もし超人称表現の遺響という面から考えうるのであれば
例題Bにおける説明は一層簡明に済むはずである。紙面も時間も尽
きるに近く、しかも私見は不熟として未練である。なお後考を重ね
ることにしたい。